

# 公開講座ダイジェスト2023

跡見学園女子大学公開講座の記録



ATOMI  
UNIVERSITY

## 刊行にあたって

コロナ禍から解放されつつあった令和5年度、跡見学園女子大学では新座、文京両キャンパスにおいて年2回の公開講座を開催した。

公開講座を受講する醍醐味とは何だろうか。知識を豊かにしたい、見聞を広げたいなど、受講の理由はさまざまであろうが、体験してほしいことは共通している。発見の喜び。その体験こそ、公開講座を受講する醍醐味にほかならない。専門的な知見に触れ、新しい世界を知る、既存の価値観の転換を迫られる。受講生のアンケートからは、多くの皆さんに発見の喜びを体験していただけたことが確認できる。

春期・新座キャンパスのテーマは「現在（いま）を造る文化の表現-デザイン、舞台そしてマンガから」。マンガを取り上げた回では、マンガというメディアの隠された機能に驚かれた方も多かったろう。文京キャンパスの「まちづくりを考える」では私たちの暮らしを支える町会・自治会、防災をテーマにした。住みやすいまちづくりのために大切なことは何か。専門家ならではの提言に触れていただいた。

秋期・新座キャンパスでは、グローバルな社会課題となって提 SDGs の問題を取り上げた。自然との共生という困難な課題に私たちはどのように向き合うべきか。具体的な方策を学んでいただいた。一方、文京キャンパスの「芸術の都をたずねて」は、ローマという都市の魅力を芸術、美術の視点から再発見していただく機会となった。

令和6年3月

跡見学園女子大学

学長 小仲信孝

# CONTENTS

刊行にあたって	跡見学園女子大学 学長 小仲 信孝	1
春期教養コース（新座キャンパス）		3
『現在（いま）を造る文化の表現』 — デザイン、舞台そしてマンガから —		
1. 自動化運転のデザインと生活	本学文学部現代文化表現学科 准教授 山本 博一	
2. 日本発ミュージカルの現在	本学文学部現代文化表現学科 准教授 川島 京子	
3. マンガが向き合う社会の姿 — コロナ・戦争・非日常	本学文学部現代文化表現学科 准教授 西原 麻里	
春期教養コース（文京キャンパス）		6
まちづくりを考える ～ 都心部での活動を事例に～		
1. 町会・自治会の機能を考える ～町会と大学ゼミ・クラスの合同プロジェクトを通して～	本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 教授 佐野美智子	
2. 地域の防災を考える ～「だれ一人取り残さない」ために～	本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 教授 鍵屋 一	
3. 地域資源の活用を考える ～旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）を舞台に～	神奈川大学国際日本学部歴史民俗学科 助教 新垣 夢乃	
秋期教養コース（新座キャンパス）		9
SDGsと私たちの生活 —自然と共生する持続可能なまち（地域）をつくるためにはどうすればよいか—		
1. 自然と共生する生活環境を実現するためにはどうすればよいのか？ —ネイチャーポジティブ（自然再興）の視点から—	本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科 教授 宮崎 正浩	
2. 脱炭素社会実現に向けたアクションを考える	本学兼任教員 宮崎 智子	
3. 環境にやさしい商品選択を考える —温室効果ガス排出の見える化の視点から—	本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科 教授 安藤 生大	
秋期教養コース（文京キャンパス）		12
芸術の都をたずねて —ローマをめぐる美術と旅		
1. ローマとルネサンスの芸術家	本学文学部人文学科 准教授 剣持あずさ	
2. バロック美術と永遠の都に引き寄せられた画家たち	本学文学部人文学科 教授 栗田 秀法	
3. 18—19世紀の風景絵画で旅するローマとその近郊	本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科 准教授 河村 英和	
資料		15

公開講座春期教養コース（新座キャンパス）  
『現在（いま）を造る文化の表現』 — デザイン、舞台そしてマンガから —  
2023年6月10日～6月24日（毎週土曜日）〈全3回〉  
〈講座責任講師〉本学文学部現代文化表現学科 准教授 山本 博一

地域と現代文化表現学科が「共に発展」していくことを本企画の目的と考えた。したがって本講座では、各回のメッセージとともに、その背景にある学科の研究・教育活動の「社会に対する意義」が講座を通じて地域に伝わることを願った。

まず現代文化表現学科の地域への周知をねらい、表題に「現代」・「文化」・「表現」という学科名称の言葉を使用した。また3講座の領域「デザイン」・「舞台」・「マンガ」は、本学科の「3つの履修モデル」とかさね、学科の教育内容を示唆させた。大学の広報、この表題と3講座の内容で総数163名が集まった。

筆者が担当した「デザイン」領域の講座（6月10日）では、自動化運転のデザインと生活との関係について事例紹介し考察を示した。受講者からは、自動化は豊かな時間をもてるが人間にとって非効率も大切と思う、などの感想があり、「文化」の視点でデザインを考えることに共感を得られたと考えている。

川島准教授が担当した「舞台」領域の講座（6月17日）では、宝塚歌劇、劇団四季などの歴史や魅力について示された。受講者からは、特に宝塚歌劇の発祥が興味深い、日本の伝統文化の一つであるという感想や意見があり、舞台を「文化表現」として捉える見方が伝わったと考える。

また西原准教授が担当した「マンガ」領域の講座（6月21日）では、社会にメッセージを発するマンガや絵画、イラストの考察が示された。受講者からは、絵は言葉よりも説得力がある、良い面と悪い面を見極めなければならない、などの感想があり、視覚表現に対する批評的視点が伝わったと考える。

以上3講座の「この講座を受講して内容について興味や関心が深まった」のアンケート結果が87.5%、95.2%、97.5%からも、現代文化表現学科の3領域のメッセージが伝わったことが分かり、メッセージの背景にある教育・研究活動の「社会に対する意義」も概ね伝わったと考える。地域と本学科との「共に発展」、および本学の発展が期待できる結果となった。

〈第1回 6月10日〉

自動化運転のデザインと生活

本学文学部現代文化表現学科 准教授  
山本 博一

本講座では、生活における自動化運転の歴史と現代の事例を紹介し、豊かな生活にとって新たな「生活を創る」自動化の重要性について提言した。質疑応答とアンケート結果から、自動化運転やデザインについて合理性以外の視点や、機能性だけでなく「楽しさ」などを尊重するデザインのあり方に共感を得られたと考える。受講者は40名で50歳代から70歳代が主であった。

講座では、まず生活機器のデザインにとって「楽しさ」などの機能性利便性以外の魅力や「人の手の介入」などが、豊かな生活にむすびつくという「デザイン」の考え方から導入した。

本題では、近代化以前の生活と生活用具について時代ごとに振りかえり、生活の「豊かさ」を確認した。次に現代に焦点を当て、煩わしい「生活の行為を省く」自動化運転について、路線バス、自動車、配膳ロボットの事例を紹介し考察を述べた。この事例を背景に、自動化運転によって人と

ともに「生活空間を移動させる」という自動車メーカーの構想や、外出できず仕事などに従事できない人々が遠方から運転ができる「分身ロボット」の事例を紹介し、「生活を創る」自動化が豊かな生活にむすびつく事例として示した。

自動化が人々の生活を豊かにしてきたが、年末の餅つきなどの生活における活動そのものが失われている現状がある。今回事例で示した「分身ロボット」は自動化運転の応用とテクノロジーによって、機能性や利便性以外の魅力、特に生活における活動を創るようにデザインされている。また生活者自身が遠方からロボットの運転を通して、自らの創造性で仕事に関わっている。このような「生活を創る」自動化運転のデザインが、これからの豊かな生活とともに新たな「文化」も築いていくはずであると講座を締め括った。

以上にご協力をいただいた、オリィ研究所、メルセデスベンツ日本（株）、国立歴史民俗博物館、大阪府教育委員会、静岡市登呂博物館、株式会社 DFA Robotics、はっぴーすまいる。、その他皆様に感謝申し上げます。

## 〈第2回 6月17日〉

### 日本発ミュージカルの現在

本学文学部現代文化表現学科 准教授  
川島 京子

統一テーマ「現在（いま）を造る文化の表現」に沿って、舞台芸術分野からはあえて大学生を含めた若者より絶大な人気を誇る「日本発ミュージカル」の最先端に焦点を当てた。ただし、他の公開講座同様、年齢層が高いことが予想されたため、そこに至るまでの歴史を丁寧に見てゆくことで受講者の興味とのズレが生じないよう努めたつもりである。

冒頭で、主にオペラとの差異からミュージカルを定義し、20世紀初頭から現代までの発展と時代

ごとの特徴を社会的背景とともに概観。さらに、それらが日本のミュージカル発展史ともリンクしていること、また、どのように咀嚼され日本に受容されたのかを時代ごとに解説した。取り上げたジャンルと内容は以下の通りである。

宝塚少女歌劇については、同じくフランスのレビュー文化の影響を受けて誕生した浅草オペラとの形式の違いや、宝塚音楽学校の意義、歌劇団のスターシステムなど。また、東宝や劇団四季によるミュージカルの輸入については、その背景と上演形式や翻案、翻訳の諸問題。さらに、ジャニーズミュージカルに見るジャニー喜多川の目指したもの、2.5 という日本発祥ミュージカルの爆発的ブームとファン文化、そして歌舞伎、能楽への影響。

主軸としたのはそれぞれのジャンルにおける最新の傾向とその先鋭性についてであるが、一貫して上記のように、いずれも各ジャンルの個別の現象として捉えるのではなく、時代ごとの文化的背景や他の芸術ジャンルとの影響関係といった視点からアプローチした。そして最終的には、昨今の学生の興味について言及するとともに、現在止めどもなく広がる「芸術」の概念について考えた。

## 〈第3回 6月25日〉

### マンガが向き合う社会の姿 — コロナ・戦争・非日常

本学文学部現代文化表現学科 准教授  
西原 麻里

本講座では COVID-19 という“非日常”に焦点を当て、マンガと現代社会との関わりをテーマにお話した。

講座の前半では、視覚表現としてのマンガの特徴と歴史、また流行病がマンガでいかに描かれてきたかを紹介した。日本のマンガは、明治期に入ってきた欧米の新聞ジャーナリズムにおける諷刺画から始まった。政治や世俗を諷刺する一枚絵は

ニュースを伝えると同時に笑いの役割もち、ユーモアを交えて時事的なネタが描かれた。そのようなマンガの役割は現在まで引き継がれており、2020年のCOVID-19流行初期には「アマビエ」のマンガや一枚絵が多数登場した。

講座の後半では、“非日常”をマンガでおもしろく捉えることの問題を考えた。たとえば厚生労働省や地方自治体は、とくに「若い方」の興味を引くものとして「アマビエ」などキャラクターを用いた感染拡大予防のメッセージを発信していた。また講談社の「MANGA Day to Day」企画は、コロナ禍の“日常”を描く作品をリレー形式で発表していた。こうした取組みの多くはおそらくポジティブに受け止められたと考えられる。

しかし、COVID-19による生活の変化や脅威を“日常”に溶けこませることで、COVID-19が引き起こした社会の問題から目を背ける面もあったのではないかと。似た“非日常”の先例として、昭和15年末に大政翼賛会が主催し新日本漫画家協会が考案した「翼賛一家」がある。「翼賛一家」は戦争と政治体制への人びとの自主的な参加を促すものとして、マンガなど多数のメディアで描かれた。当時の人びとにとって、「翼賛一家」は辛い“非日常”を忘れられる企画であっただろう。

こうして考えると、危機的状況を“日常”にしてはならないことがわかる。その好例である「マンガパンデミック Web展」(京都国際マンガミュージアム)では、世界各地からマンガやイラスト作品が投稿された。この中にはギャグだけでなく、環境問題や経済格差など、政治的・社会的メッセージを明確に含む作品も多数あった。マンガを単なる楽しいものとみなすことの危うさや、人によって災厄の受け止め方や考え方が異なることを見失ってはならない。それが、いまのマンガ文化を知るうえで肝要なことである。

**公開講座春期教養コース（文京キャンパス）**  
**まちづくりを考える ～都心部での活動を事例に～**  
**2023年7月1日～7月15日（毎週土曜日）〈全3回〉**  
**〈講座責任講師〉 本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 教授 佐野美智子**

本講座は、「まちづくりを考える」を共通主題として、観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科教員が3回シリーズで実施した（新垣講師は、現在神奈川大学助教）。副題を「都市部での活動を事例に」とし、都市部における町会機能、防災の在り方、地域資源としての文化財活用、という多彩な観点から、「まちづくり」について考える機会とした。講演終了後も活発な意見交換が行われ、また、グループワークを導入する回があるなど、参加型の講座が展開された。

第1回講座のテーマは、「町会・自治会の機能を考える—町会と大学ゼミ・クラスの合同プロジェクトを通して—」（佐野美智子講師）。まちづくりにおいて肝要となるのが、多種多様な団体・個人をつなぐネットワークの形成。その「ハブ（結節点）」となることが町会に期待されることを、町会との合同調査結果から示し、受講者とともに考えた。

第2回講座のテーマは、「地域の防災を考える—『だれ一人取り残さない』ために—」（鍵屋一講師）。首都直下地震に十分な備えをしない人が多いのはなぜか。マンション住まいの人の近所付き合いの弱さなど取り上げながら、自分を守り、弱い立場の人を守るための方法について、受講者とともに考えた。

第3回講座のテーマは、「地域資源の活用を考える—旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）を舞台に—」（新垣夢乃講師）。樋口一葉ゆかりの旧伊勢屋質店（文京区指定有形文化財、学校法人跡見学園が取得・保存）での活動をもとに、文化財の保存から「活用」への転換が図られる現在、地域資源としての文化財について、受講者、学生とのグループワークを通して考えた。

講座受講者のアンケート結果を見ると、おおむね好評であり、特に防災の回では全員が「興味や

関心が深まった」と回答するなど、自分事として考える機会となったことが伺えた。また、地域資源の回で導入したグループワークを好感する意見が多かったことも特筆に値する。今後、参加型の講座運営の工夫も必要となろう。

**〈第1回 7月1日〉**

**町会・自治会の機能を考える**

**～町会と大学ゼミ・クラスの合同プロジェクトを通して～**

**本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科教授**

**佐野美智子**

「誰もが〈住みやすい〉と実感できる」「誰もが幸せに暮らす」——そんなまちをつくるためには、まちに係わる多種多様な団体・個人がつながり、ネットワークを形成し、行動することが必要であり、そのハブ（結節点）としての機能が町会・自治会に期待されている。文京区大塚仲町町会との合同プロジェクトによる調査活動から見てきた結果だ。

プロジェクトのテーマは、「地域に暮らす人たちが〈住みやすいまちだと実感できる〉まちづくり」。仲町地域の現状把握と課題の明確化を目的に、2022年4月にスタートした。町会メンバーからのヒアリングを皮切りに、地域踏査、地域データの収集といった事前準備を重ね、9月にアンケート調査、11月にインタビュー調査を実施した。講座では、調査結果をもとに作成した《住みやすいまち》モデルについて説明した。

モデルでは、《住みやすいまち》の要件が《安心》であり、《安心》の要件が《顔見知り》（互いの顔を見知っていること）であることを示した。《住みやすいまち》に影響する要因には〈住環境

の良さ>という側面もあり、良好な住環境は<子育て世帯の多さ>につながる。そして、子育て世帯の多さは、子どもをきっかけにした《顔見知り》の広がりにつながる。一方、地域には単身者も多いのだが、地域の人と知り合うきっかけが少なく、<知り合うきっかけ作り>が必要である。そこに関わってくるのが<情報交換>の重要性だ。多様な媒体を使った、一方向の告知型ではないネットワーク型の情報交流が、知り合うきっかけ作りには役立つ。若い人や単身者にとっての《顔見知り》=《安心》には、「無理強いしない関係」「程よい距離感のつきあい」の要素が重要となる。そして、<情報交換>や<知り合うきっかけ作り>への関与が期待されるのが、<町会の役割>。<町会の役割>を構成するのは<人と人をつなぐ>（情報をつなぐ）という要素であり、「つなぐ」機能が町会には期待されている。

## 〈第2回 7月8日〉

### 地域の防災を考える

#### ～「だれ一人取り残さない」ために～

本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科教授  
鍵屋 一

まちづくりを考える一都心部での活動を事例に  
一第2回は、「地域の防災を考える一「だれ一人取り残さない」ために 一」についてお話をした。

最初に私のふるさと秋田県男鹿市の「なまはげ」について紹介した。なまはげは大晦日の夜に子どもがいる家にやってきて「泣く子はいねが」と脅す姿が有名だが、実は高齢者などの家にも訪問して体調などを観察している。そして、いざ災害となったときに、支援者たるなまはげは、避難が難しい高齢者などを助けることができる。日常の風習が実は防災につながる事例である。

都市を襲う災害で最も甚大な被害をもたらすのは大地震である。阪神・淡路大震災の教訓に学べば、人命を守るために最も重要なことは「住宅の

耐震化」である。耐震化を進めるために、ほとんどすべての自治体は自己負担を求めている。自己負担のできる人が、公的支援を得て耐震化できる。一方で、自己負担のできない人は、公的支援を得ることができない。これは「だれ一人取り残さない」フェアな制度であろうか。唯一、高知県黒潮町は自己負担を求めている。このため驚異的な実績を残している。

次に、社会が脆弱化していることを取り上げた。この30年間で75歳以上高齢者は約3倍、高齢単身世帯も3倍以上に増えた。一方で、近所の人と親しくしている人は30年前には5割近くいたのが、今は1割を切るほど人のつながりが弱くなっている。都市ではこの傾向が一層強い。災害は老若男女を問わず、貧富を問わず、みんなの困りごとだから、対話や活動のきっかけとなりやすい。これでつながりを再構築していくのだ。

最後に、トイレの重要性を話した。大災害では停電、断水になりトイレが使えなくなる。現代都市の主要な居住形態はマンションだが、トイレが使えないとどうなるだろうか。人は1日に平均5回トイレを使うが、そのために毎回、階段を徒歩で降りて避難所などのトイレに並ぶことになる。しかも、真夜中は真っ暗である。現在、簡易トイレを1個でも備蓄している家庭はわずか2割に過ぎない。まずはトイレの備えから始めたい。

受講者からは、わかりやすかった、身近な話で準備しなければ、などという感想が聞かれ、ありがたかった。

## 〈第3回 7月15日〉

### 地域資源の活用を考える

#### ～旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）を舞台に～

神奈川大学国際日本学部歴史民俗学科助教  
新垣 夢乃

講座では、現代日本において文化財の「活用」の中身がどのように変化してきたのを法律や文化

財行政側の資料をもとに解説した。そこでは、文化財が博物館や美術館での展示を通じて教育、文化的生活に資するという目的での活用から、近年では観光資源としての活用へと変化している現状を示した。

さらに、この変化は、地域の文化財は地域の人々のために活用するというスタンスから、地域外の人々のための活用へと誰のための活用なのかという点でも変化していることを示した。

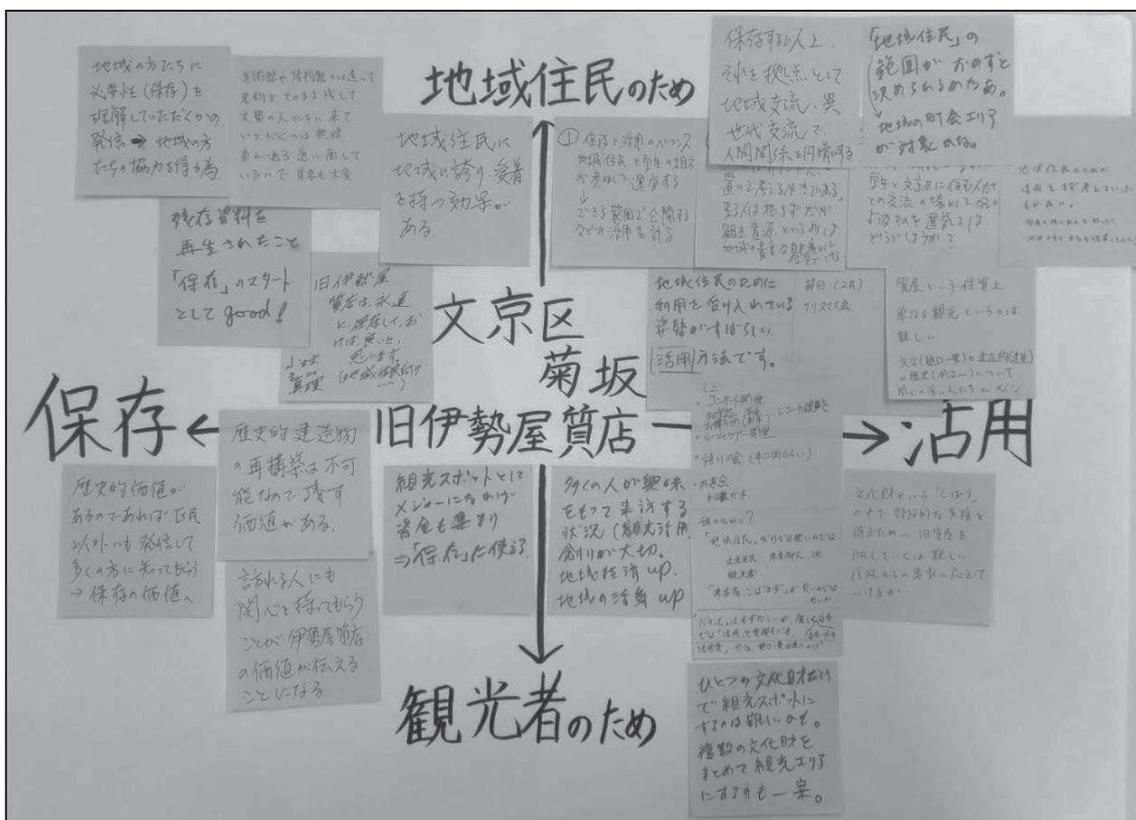
次世代の文化財の保存と活用を担う学芸員の養成課程を有する大学では、近年の文化財の活用の中身の変化に対応する教育が求められていると現状を整理した。

この現状に対応する試みとして、跡見学園が所有する文京区指定有形文化財の旧伊勢屋質店では跡見学園女子大学の学生たちが所蔵資料の保存、調査、修復の活動、さらには旧伊勢屋質店を地元地域と連携して活用する活動を行っていることを紹介した。

そして、公開講座の学びをより豊かなものにするために、受講生と旧伊勢屋質店で活動してきた学生たちが、旧伊勢屋質店を対象として文化財の保存と活用の理想的なバランスとは？、その理想的なバランスにおいて実施可能な活用案は？というテーマでグループワークを行った。

そこでは、観光スポット化することが保存につながるのではないかと、観光等で活用することではじめて多くの人々に関心を持ってもらえるのではないかという意見や、保存することを重視し、活用を地域住民のために行うことを優先すべきではないか等の多様な議論が展開された。

このような議論は、近年の文化財の活用の議論において置いてけぼりとなっている地域の声の重要性を再認識させるもので、次世代を担う学生たちも地域の多様な世代の人々と議論しなくてはならないことであるとして講座の締めくくりとした。



## 公開講座秋期教養コース（新座キャンパス）

### SDGs と私たちの生活

—自然と共生する持続可能なまち（地域）をつくるためにはどうすればよいか—

2023年11月18日～12月2日（土曜日）〈全3回〉

〈講座責任講師〉本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科 教授 宮崎 正浩

今回の公開講座「SDGs と私たちの生活—自然と共生する持続可能なまち（地域）をつくるためにはどうすればよいか—」は、マネジメント学部生活環境マネジメント学科の中で環境を担当する教員が企画したものである。

2015年に国連が採択した「国連持続可能な開発目標（SDGs）」では、2030年までに世界の貧困を撲滅するなど17の目標を掲げている。このうち環境の分野では、気候変動対策や生物多様性の保全などグローバルな目標から持続可能なまちづくりなどローカルな目標が挙げられている。いずれの目標もその実現のためには政府、企業、市民のパートナーシップが重要である。日本では、近年SDGsの認知度は高まっており、その実現のために政府、企業、市民が協働する取り組みが拡大しつつある。

生活環境マネジメント学科は、衣食住などの生活と環境に焦点を当ててマネジメント（経営）を学ぶ学科であり、生活とSDGsに密接に関係した授業を多数開講している。今回の公開講座は、市民にとって特に関心があると思われる3つのテーマを選び、本学新座キャンパスにて下記の通り実施した。

第1回（11月18日）

自然と共生する生活環境を実現するためにはどうすればよいか？—ネイチャーポジティブ（自然再興）の視点から—

宮崎 正浩（教授）

第2回（11月25日）

脱炭素社会実現に向けたアクションを考える  
宮崎 智子（兼任教員）

第3回（12月2日）

環境にやさしい商品選択を考える  
—温室効果ガス排出の見える化の視点から—  
安藤 生大（教授）

当日の参加者は、第1回が34名、第2回が32名、第3回が35名だった。参加者へのアンケート調査からは、3回の講義はいずれも、わかりやすい内容でよく理解できた、自分自身の行動の見直しが必要だと感じた、などの回答があった。今回の公開講座を契機に、大学と地域の方々との間で情報を共有することにより、自然と共生する持続可能なまち（地域）づくりを通じ、SDGsの実現に向けた取り組みが一層進展することを願っている。

〈第1回 11月18日〉

自然と共生する生活環境を実現するためにはどうすればよいか？

—ネイチャーポジティブ（自然再興）の視点から—

本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科教授  
宮崎 正浩

私たちの生活も企業活動も健全な自然の恵みによって成り立っている。しかし、世界的に自然は減少しており、現在では約100万種の生物が数十年で絶滅する危機にあると言われている。このままでは生物多様性の損失はさらに加速化し、生態系の大規模な崩壊が心配される。このような世界的な生物多様性の危機の直接的な原因は、①開発による土地の改変、②乱獲、③外来種、④気候変動、⑤環境汚染、⑥（日本では）里山の喪失であるが、根本の原因は、持続可能でない私たちの生活と企業活動である。

2015年に採択されたSDGsでは、その第14、15目標に海域と陸域の生物多様性を保全することが掲げられている。2022年に開催された生物多様性条約締約国会議（COP15）では、2030年までに自然の損失を止め、反転させるネイチャーポジティブ（自然再興）を目標とする「昆明・モント

リオール枠組」が採択された。この目標を実現するための具体的な目標としては、各国が 2030 年までに陸地と海洋の 30%を保護区又は保護区以外の効果的に保護されている区域（OECM）によって保護することとされている（30 by 30）。OECMには企業などが保護する自然も含まれ、日本では環境省がその認証制度を開始している。

本講義では、以上の説明の後、地域の具体的な事例として新座市を取り上げた。同市は、平林寺の境内林や各地に散在する雑木林など比較的多くの自然が残されている。2032 年度を目標とする同市の環境基本計画では、望ましい環境像を「豊かな暮らしが自然と共生する 持続可能なまち『にいざ』」と定め、雑木林の保全など環境保全に取り組んでいる。しかし、現実には宅地開発の進展によって雑木林の急速な減少が続いている。新座においてネイチャーポジティブを実現するためには、国レベルでの政策の転換、企業や市民の行動変容が極めて重要であるが、新座市において自然と共生するまちづくりを目標に市民、企業、市役所、大学が協力することが重要と言える。

## 〈第 2 回 11 月 25 日〉

### 脱炭素社会実現に向けたアクションを考える

本学兼任講師  
宮崎 智子

2023 年 9 月に気象庁は、夏（6～8 月）の全国の平均気温が 1898 年の統計開始以来最高だったと発表した。日本に限らず世界各国が熱波に見舞われた。この状況を国連のアントニオ・グテーレス事務総長は「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が来た」と警告している。地球温暖化対策は、まさに待ったなしの状況なのだ。

しかし、2015 年に採択された気候変動問題に関する国際的な枠組みの「パリ協定」が掲げた「世界の平均気温上昇を産業革命以前と比べて 2 度より十分低く保ち、1.5 度以内に抑える努力をする」

という目標は、日本を含め多くの国が達成するのは難しいと言われている。

目標を達成するために、世界各国はエネルギー政策の見直しや脱炭素分野への投資など、さまざまな施策を打ち出している。企業もカーボンニュートラル（排出量から吸収量と除去量を差し引いた合計をゼロにすること）を目標に掲げ、省エネ・創エネの推進や新技術や新事業の創出などに取組んでいる。

地球温暖化への対策を求められているのは、政府や企業だけではない。家庭部門から排出される二酸化炭素の量も決して小さいものではないからである。環境省は、脱炭素の実現に向けて家庭部門の CO2 排出量を、2030 年までに 2013 年比で 66%削減するという目標を掲げている。

地球温暖化は私たちの生活と大きく関係しており、衣食住・移動・買い物など日々の生活の中で、一人ひとりが脱炭素を意識して行動することが重要である。例えば、地元の製品を買う、マイボトルやマイバックを持ち歩くなどである。まずは、出来ることから始めることが脱炭素化への第一歩である。

「私たちは先祖から地球を受け継いでいるのではなく、私たちの子孫からそれを借りているだけである」というアメリカ先住民に古くから伝わる言い伝えがある。自然豊かな地球を子孫にそのまま返すために、私たち一人ひとりにできることは何かを考え、実践することで脱炭素社会を実現していきたい。

## 〈第 3 回 12 月 2 日〉

### 環境にやさしい商品選択を考える

#### 一 温室効果ガス排出の見える化の視点から一

本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科教授  
安藤 生大

跡見学園女子大学 2023 年度秋の公開講座の第 3 回は、テーマを「環境にやさしい商品選択を考え

る「温室効果ガス排出の見える化の視点から」とし、2023年12月2日に行った。

食品や日用品など、お店に並んでいる商品は、それらを「つくる」、「つかう」、「すてる」の一生（ライフサイクル）から、たくさんの二酸化炭素（以後、“CO<sub>2</sub>”）を排出している。今回の講演では、講演者が過去に取り組んだ千葉県銚子市で栽培されたキャベツを例として、そのライフサイクル全体でのCO<sub>2</sub>排出量の試算結果を紹介した。

調査した範囲は、1. 原料調達段階（播種・育苗工程、圃場準備工程）、2. 生産段階（栽培工程、収穫工程）、3. 流通・販売段階（保管工程、輸送工程、販売工程）、4. 使用・維持管理段階（冷蔵工程、調理工程）、5. 廃棄・リサイクル段階とし、全体で5段階10工程とした。それぞれの工程で消費された物（農薬、栽培資材、梱包材など）とエネルギー（ガソリン、軽油、ガスなど）を、さまざまな場所（農家や農協など）にて調査し、そこから算出されたCO<sub>2</sub>量を積み上げて、キャベツ1kg当りに換算した結果を示した。

結果は、キャベツのライフサイクル全体で360.0g-CO<sub>2</sub>/kg（単位の意味：キャベツ1kgあたりのCO<sub>2</sub>排出量のg数）と試算された。段階毎のCO<sub>2</sub>排出割合のみ示すと、原料調達段階で10.0%、生産段階で25.6%、流通・販売段階で19.6%、使用・維持管理段階で43.4%、廃棄・リサイクル段階で1.3%となった。特に調理工程からのCO<sub>2</sub>排出割合が大きい結果となったため、その削減対策として電子レンジによる調理を検討した。結果は、お湯で煮た場合と比較して、半分程度のCO<sub>2</sub>排出量となり、調理時間も短縮できる結果となった。つまり、家庭での調理の仕方を工夫すると、効果的にCO<sub>2</sub>排出量を削減できることを示した。

今回の講演を通じて、受講者の方々の商品選択基準に、「価格」と「機能（味など）」に加えて「カーボンフットプリント（環境指標）」が導入され、環境を意識した持続可能な消費行動の実践につながることを期待したい。

公開講座秋期教養コース（文京キャンパス）  
芸術の都をたずねて ―ローマをめぐる美術と旅  
2022年12月9日～12月23日（毎週土曜日）〈全3回〉  
〈講座責任講師〉 本学文学部人文学科 准教授 剣持あずさ

2023年の秋期公開講座は、西洋美術史を基本テーマとしつつ、親しみやすく、参加される方がより興味を持てる内容にすることを目指した。テーマ選びに悩んでいたとき、ちょうど本講座と近い時期に「永遠の都ローマ」展（2023年9月16日・12月10日東京都美術館、2024年1月5日・3月10日福岡市美術館）が開催される予定であることを知った。ローマは、誰もが知る古代ローマ帝国の都であることはもちろん、ルネサンス以降多くの芸術家を引きつけた芸術の都でもある。さらに、イタリア旅行で実際に訪れた方も多だろう。展覧会の開催にあやかる形で「ローマ」という軸はここからとらせていただき、その上で、本学教員の専門領域に合わせて、15世紀から19世紀までの各時代の美術を異なる切り口で紹介することとした。とりわけ、本学観光コミュニティ学部の河村の専門領域に関連づけて、テーマに「旅」という視点を取り入れたことで、いわゆる「ヨーロッパの美術」に敷居の高さを感じる方にも興味を持っていただければ、という狙いがあった。

第1回を担当した剣持は、荒廃していたローマが15世紀に復興していくようすを歴代教皇の事跡や関連作品とともに紹介した。第2回目を担当した本学教授の栗田は、バロックの都となった17世紀のローマを彩った芸術家たちの軌跡を紹介した。最終回では、河村が、「旅」という切り口から18世紀以降のイタリア旅行と風景画について論じた。

参加者の感想は概ね好評であったが、回によってはわかりにくいという指摘や、時間の短さ、資料不足について、また運営上の不手際についてのお叱りの言葉もいただいた。その点については、今後改善していく必要がある。一方で、学んだ内容をもっと調べたい、イタリアに行き実物を見たい、ローマ旅行を思い出した等、参加者の知的好奇心を刺激し得たことが伝わる感想もいただくこ

とができた。西洋美術への理解や興味が少しでも深まり、参加された皆様の学びの一助になったなら、大変うれしく、ありがたく思う。

〈第1回 12月9日〉

ローマとルネサンスの芸術家

本学文学部人文学科准教授  
剣持 あずさ

15世紀に花開いたイタリア・ルネサンスの最初の中心地はフィレンツェであった。一方、かつてローマ帝国の都であったローマは、西ローマ帝国が滅亡したのち、ローマ司教（教皇）の都市であったものの、中世の混乱期を通じて荒廃していった。しかし15世紀の歴代の教皇によってローマは少しずつ整備されていった。また、古代美術を熱心に研究したルネサンスの芸術家たちにとっても、ローマは古の都として特別な位置を占めていたのである。

アヴィニオンに教皇庁が移った教会大分裂の時期をへて、コンスタンツ公会議で選出されたマルティヌス5世（在1417-1431）をはじめ、エウゲニウス4世（在1431-1447）、ニコラウス5世（在1447-1455）、シクストゥス4世（在1471-1484）などの教皇たちは城壁や主な聖堂、道路の補修・整備を進めた。なかでもニコラウス5世は、サン・ピエトロ大聖堂を核とした要塞的な教皇庁をつくることを計画し、現在に至る教皇庁の姿の先鞭をつけたと言える。また、シクストゥス4世はラテラノ宮殿にあった4点のブロンズ像をカピトリノの丘に移して展示したことや（これがカピトリノ美術館の起源）、システィーナ礼拝堂を建造したことで知られている。

ルネサンスの芸術家たちは、古代美術を大いに

研究しその成果を作品に生かした。彫刻家のブルネレスキは有名な古代彫刻《とげを抜く少年》を参照していたし、システーナ礼拝堂を飾るボッティチェリの壁画《反逆者たちの懲罰》には、コンスタンティヌス凱旋門が描かれている。ボッティチェリ作品では、《春》に描かれた女神フローラにも古代の女神像の面影をみることができる。他にも《ヴィーナスの誕生》でもつれあって飛ぶ西風とクロリスの姿や、フランクフルトにある《若い女性の肖像（シモネッタ・ベスプッチ？）》のペンダントにも、メディチ家が所有していた古代の彫玉からのモチーフの引用が指摘されている。若きミケランジェロも古代彫刻を装った《眠るクピド》を制作し、ローマの美術市場におくったという。このように古代美術のモチーフがさまざまに引用されたことは、メディチ家をはじめとする当時の権力者や愛好家たちの間で古代彫刻や工芸品が流通し、コレクションされていたこととも密接に関係していた。

## 〈第2回 12月16日〉

### バロック美術と永遠の都に引き寄せられた 画家たち

本学文学部人文学科教授  
栗田 秀法

宗教改革を乗り越えたカトリックの総本山ローマはヨーロッパ中から巡礼者を集めるだけでなく、ヨーロッパ各地から多くの芸術家を引き寄せ、バロック美術をきわめて豊かなものにした。ローマの誘惑に魅せられた画家たちの作品を紹介すべく、講座は「反宗教改革と美術の革新」と「永遠の都に引き寄せられた画家たち」の2部構成でなされた。

前半では、バロック美術誕生のきっかけのひとつトリエント公会議の聖画像に関する教令を紹介し、その精神を最大限に実現した芸術家として彫刻家バルニーニ、画家カラヴァッジョの仕事をサ

ン・ピエトロ大聖堂やローマの教会等に現存する作例に即し紹介するとともに、カラヴァッジョにまつわる「聖マタイ論争」やルネサンス美術とバロック美術の造形的な特質の相違について詳しく紹介した。

後半では、様々な経緯で古代美術と盛期ルネサンス美術の宝庫ローマに引き寄せられた多数の芸術家のうち、フランドルからはルーベンス、スペインからはベラスケス、フランスからは画業のほぼすべてをローマで費やしたプッサンとクロード・ロランを取り上げた。

ルーベンスに関しては、《聖母子の画像を崇める聖グレゴリウスと聖女ドミティッラ》《キリスト昇架》を例に、画家がローマでいかに古代彫刻や盛期ルネサンスの芸術を自家薬籠中にした上でどのように独自の芸術に高めたかを検討し、ベラスケスに関してはローマで歴史画制作に挑んだ背景を《ヨセフの衣を受け取るヤコブ》を取り上げ、プッサンやティツィアーノとの関わりから考察した。プッサンに関しては、画中に炎上するサン・タンジェロ城が描き込まれたオルフェウスとエウリュディケの婚礼が描かれた作品を詳しく分析し、そのメッセージを読み解いた。クロード・ロランに関しては、《カピトリノの丘のある港の情景》《カンポ・ヴァチーノの風景》をはじめとするローマやその近郊を描いた作品を取り上げ、その芸術の特質を紹介した。

## 〈第3回 12月23日〉

### 18-19世紀の風景絵画で旅するローマと その近郊

本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科准教授  
河村 英和

本講座は、ローマとその近郊を描いた風景画の歴史を、18～19世紀の旅行者のローマ土産であった側面から、解説したものである。

かつて風景画は、絵画芸術のなかではワンラン

ク下のものと考えられていた。フランス政府による、有望な芸術家をローマへ留学させるための、権威ある奨学制度「ローマ賞」では、風景画は19世紀まで対象外であった。そんな風景画が初めて「ファインアート」の地位に上りつめられるようになったのは、ローマ平原をモチーフにした「理想風景（もしくは英雄風景）」と称される「架空の」風景画だった。「理想風景」と呼ばれるのは、古代ローマの詩人ウェルギリウスが謳った「<sup>アルカディア</sup>理想郷」を表現すべく、「教養的で」牧歌的な自然風景を描いたからであった。ときに「英雄風景」という呼び名もあるのは、風景が主役でありながらも、その中に小さいサイズの古代人（羊飼いや、聖書や神話上の人物・英雄など）が登場するためである。この「理想風景」という一大ジャンルを築いたのは、ローマ在住のフランス人画家たち、ブッサン、ロラン、デュゲであり、彼らが描く理想風景画は、ローマ平原の風景からインスパイアされていたため、ローマ貴族に蒐集される一方で、17～18世紀のグランドツアーでローマを訪れた英国貴族にも人気が高く、本物を入手できなければ複製をローマ土産とすることもあった。同じころ流行した、新たなローマの風景画のジャンルに、ローマ在住のオランダ人ファン・ラールを開祖とする「バンボッチャータ」もあった。小型のキャビネットサイズで、庶民の生活風俗を描き、背景にローマ遺跡や建物・風景も描き込まれたもので、こちらも旅行者にとって恰好のローマ土産になった。

18世紀は、都市景観をカメラのごとく見たままに捉えた「ヴェドゥータ」や、有名なローマ遺跡と実在しない廃墟を自由に組み合わせて構成した架空の風景画「カプリッチョ」が、グランドツアーリストの需要に合致したローマ土産として人気を博し、どちらも風景画の一大ジャンルに成長した。さらにローマに来た記念撮影の代わりに、ローマらしいアイテム（パンテオン、ヴァチカン美術館の収蔵品、ティヴォリのシビッラの神殿など）を背景に入れ、自身の姿を描いてもらうことも、パニーニなどのローマ在住の肖像画家たちによって行われ、これを土産として持ち帰ることは、グラ

ンドツアーリストのステイタスとなっていた。

またローマ平原は、「理想風景」揺籃の地として、画家にとっては「聖地」あるいは「<sup>アルカディア</sup>理想郷」であり、一生に一度はそこに赴いてローマ平原の風景を描くことは通過儀礼であった。ローマ平原でもアルバーノ山周辺は、ローマ＝ナポリ間の馬車ルートの街道沿いであるため、外国人画家やグランドツアーリストにとっては、たいへん馴染みある場所であった。しかし19世紀になると、ローマ平原であっても交通の便が悪く18世紀までの画家がまだあまり行っていなかったアニエネ川・ザビーネ山方面が、「新天地」として外国人画家たちによって開拓された。そんななか両エリアをまたぐ、チョチャーリア地方では、美しい民族衣装に身を包んだ村娘の姿を主役とし、ローマ平原は脇役の背景となった美人画のジャンルも発展していった。

## ■ 資料

令和5年度 春期

# 跡見学園女子大学の 公開講座のご案内

## 新座キャンパス

令和5年  
6/10  
6/24  
毎週土曜日  
〈全3回〉

これからのためにいまをよみ解く

教養コース

## 現在(いま)を造る文化の表現 —デザイン、舞台そしてマンガから—

後援：埼玉県教育委員会・新座市教育委員会

## 文京キャンパス

令和5年  
7/1  
7/15  
毎週土曜日  
〈全3回〉

誰もが幸せに暮らすために

教養コース

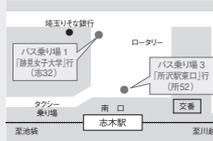
## まちづくりを考える —都心部での活動を事例に—

後援：文京区・公益財団法人文京アカデミー



## 新座キャンパスへのご案内

- 東武東上線(地下鉄有楽町線・副都心線)「志木」下車 南口より西武バス約15分「跡見女子大」下車



## ●JR武蔵野線

- 「新座駅」下車 北口より西武バス約7分「跡見女子大」下車



## ●西武池袋線・西武新宿線

- 「所沢駅」下車 東口より西武バス約25分「跡見女子大」下車

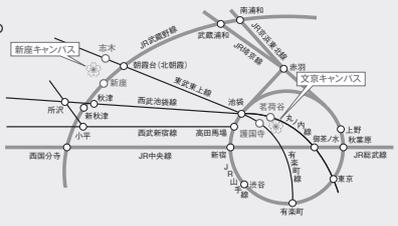
※新座・文京キャンパスともに自家用車のご案内はございません。

## 文京キャンパスへのご案内

- 東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷駅」より徒歩2分
- 東京メトロ有楽町線「護国寺駅」より徒歩8分



## 新座キャンパス 文京キャンパスまでの 路線図



<申込・照会先>



新座キャンパス  
教務部教務課 公開講座係  
〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6  
TEL 048-478-3340  
FAX 048-478-4133  
E-mail: d-kyomu@mcmc.atomi.ac.jp  
https://www.atomi.ac.jp/univ/

文京キャンパス  
文京キャンパス事務局 公開講座係  
〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2  
TEL 03-3941-7420  
FAX 03-3941-8333  
E-mail: d-kyomu@mcmc.atomi.ac.jp  
https://www.atomi.ac.jp/univ/

# 跡見の二つのキャンパスで「新しい学び」を愉しむ

## 新座キャンパス

教養コース

## 現在(いま)を造る文化の表現 —デザイン、舞台そしてマンガから—

令和5年6月10日、17日、24日(土) 毎週土曜日(全3回)

時間	10:00~11:30	場所	新座キャンパス	対象	15歳以上(中学生を除く)の男女
定員	100名(応募者多数の場合は抽選)	受講料	無料	講師	山本 博一

講座責任講師 本学文学部現代文化表現学科 准教授 山本 博一

6/10(土)

### 自動化運転のデザインと生活

講師：本学文学部現代文化表現学科 准教授 山本 博一

身近な機器の歴史をふり返ると、洗濯や掃除などの「自動化」が人々の生活を豊かにしてきたことが見えてきます。しかしながら機器の「自動化」によって、餅つきなどの行事や生業などの生活の一部が失われていく現状もあります。本講座では身近な機器の「自動化」の実例を紹介し、私たちの豊かな生活と「自動化」の関係について考えます。

6/17(土)

### 日本発ミュージカルの現在

講師：本学文学部現代文化表現学科 准教授 川島 京子

コロナ禍で公演の中止・延期を余儀なくされていた舞台芸術界もようやく活気を取り戻してきました。今回はミュージカル、なかでも宝塚歌劇や劇団四季、2.5次元ミュージカル、ジャニーズのミュージカルなど、今とをときめく日本発ミュージカルに焦点を当て、歴史を振り返りながらその発展と魅力を、初心者の方にもわかりやすくお話ししてゆきます。

6/24(土)

### マンガが向き合う社会の姿—コロナ・戦争・非日常

講師：本学文学部現代文化表現学科 准教授 西原 麻里

マンガや絵画、イラストなどの視覚表現は、流行り病や戦争など悲惨な出来事を「笑い」に変えて描いてきました。だからこそ親しみやすく伝わるメディアだといえますが、一方で都合よく見えなくさせられる問題もあります。この社会を生きるためにマンガが何を描きどのようなメッセージを発してきたか、過去の事例も振り返りながら考えていきましょう。

申込方法  
受付期間

Web・往復はがきのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。  
 ①「現在を造る文化の表現」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所 ④電話番号 ⑤年齢  
 ⑥職業 ⑦本講座をお知りになったきっかけ ⑧次回以降の本学公開講座のご案内ご希望の有無  
 受付期間：5月11日(木)～5月23日(火) 必着  
 受付方法：Webフォーム(受付開始日よりHP上に設置)・往復はがきのいずれか  
 ※E-mailでのお申し込みはお控えください。

申込先  
問合せ

跡見学園女子大学 新座キャンパス 教務部教務課 公開講座係  
 〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6  
 TEL 048-478-3340 FAX 048-478-4133  
 E-mail: d-kyomu@mcmc.atomi.ac.jp https://www.atomi.ac.jp/univ/

新座キャンパス  
文京キャンパス  
共通事項

- 受講特典：全3回全て出席の受講生に、公開講座修了証を発行いたします。また、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、従来特典としていた本学図書館の利用はできません。
- 感染症対策：受講時に検温やマスク着用のご協力をお願いいたします。マスク未着用や、発熱、体調不良時には公開講座の受講をご遠慮いただく場合があります。

## 文京キャンパス

教養コース

## まちづくりを考える —都心部での活動を事例に—

令和5年7月1日、8日、15日(土) 毎週土曜日(全3回)

時間	10:00~11:30	場所	文京キャンパス	対象	15歳以上(中学生を除く)の男女
定員	100名(応募者多数の場合は抽選)	受講料	無料	講師	佐野 美智子

講座責任講師 本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 教授 佐野 美智子

7/1(土)

### 町会・自治会の機能を考える

—町会と大学ゼミ・クラスの合同プロジェクトを通して—

講師：本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 教授 佐野 美智子  
 「誰もが「住みやすい」と実感できる」「誰もが幸せに暮らす」。そんなまちをつくるためには、まちに係わる多様な団体・グループ・個人が「つながり」、ネットワークを形成し、行動することが必要です。そのハブ(結節点)としての機能を期待される町会・自治会、文京区大塚仲町町会との合同プロジェクトで昨年実施した調査結果をもとに考えます。

7/8(土)

### 地域の防災を考える—「誰ひとり取り残さない」ために—

講師：本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 教授 鐘屋 一

首都圏下地震の30年確率は70%、交通事故でけがをする確率は約10%です。しかし、多くの人は十分な備えをしていません。それは、なぜでしょうか。マンション住まいの方は特にエレベーターやご近所付き合いの弱さなどが心配です。また、お困りになるのは高齢者、障がい者、子どもたちです。自分を守り、弱い立場の人を守るために、一緒に考えてまいりましょう。

7/15(土)

### 地域資源の活用を考える—旧伊勢屋質店(南坂見隠)を舞台に—

講師：神奈川県国際日本学部歴史民俗学 助教 新垣 夢乃

2022年度に博物館法が改正されました。この改正は、文化財の保存から「活用」への転換とも言われています。では、文化財の活用とはなんだろうかどう活用したらよいのだろうか?これは地域資源としての文化財を考えるうえで、現代的な大きな課題になっています。この課題について、旧伊勢屋質店の事例から一緒に考えてみましょう。

申込方法  
受付期間

Web・往復はがきのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。  
 ①「まちづくりを考える」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所 ④電話番号 ⑤年齢  
 ⑥職業 ⑦本講座をお知りになったきっかけ ⑧次回以降の本学公開講座のご案内ご希望の有無  
 受付期間：5月11日(木)～6月6日(火) 必着  
 受付方法：Webフォーム(受付開始日よりHP上に設置)・往復はがきのいずれか  
 ※E-mailでのお申し込みはお控えください。

申込先  
問合せ

跡見学園女子大学 文京キャンパス事務局 公開講座係  
 〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2  
 TEL 03-3941-7420 FAX 03-3941-8333  
 E-mail: d-kyomu@mcmc.atomi.ac.jp https://www.atomi.ac.jp/univ/

- ※教養コースは、受付期間終了後、葉書にて受講証を郵送いたします(応募者多数の場合は抽選となります)。
- ※お申し込みいただいた方々の個人情報は、跡見学園女子大学教務部教務課公開講座係にて、講座案内の他、適宜に必要な範囲で適切に管理し、使用いたします。個人情報については同意なしに第三者に開示・提供することはありません(法令などにより開示を求められた場合を除く)。
- ※悪天候等、不測の事態が生じた場合には、本学HP中に中止や時間繰り下げ等の情報を掲載いたします。

令和5年度 秋期

# 跡見学園女子大学の公開講座のご案内

## 新座キャンパス

令和5年  
11/18  
12/2  
毎週土曜日  
(全3回)

未来のために今できること

教養コース

## SDGsと私たちの生活

—自然と共生する持続可能なまち（地域）をつくるためにはどうすればよいか—

共催：新座市教育委員会  
後援：埼玉県教育委員会・埼玉まなびいプロジェクト協賛事業

## 文京キャンパス

令和5年  
12/9  
12/23  
毎週土曜日  
(全3回)

ルネサンスからバロック、そして近代へ

教養コース

## 芸術の都をたずねて

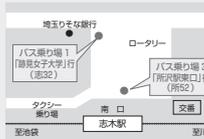
—ローマをめぐる美術と旅—

後援：文京区・公益財団法人文京アカデミー



### 新座キャンパスへのご案内

- 東武東上線（地下鉄有楽町線・副都心線）「志木駅」下車 南口より西武バス約15分「跡見女子大」下車



### ●JR武蔵野線

- 「新座駅」下車 北口より西武バス約7分「跡見女子大」下車



### ●西武池袋線・西武新宿線

- 「所沢駅」下車 東口より西武バス約25分「跡見女子大」下車

\*新座・文京キャンパスともに自家用車でのアクセスはご遠慮ください。

### 文京キャンパスへのご案内

- 東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷駅」より徒歩2分
- 東京メトロ有楽町線「護国寺駅」より徒歩8分



### 新座キャンパス 文京キャンパスまでの路線図



<申込・照会先>



#### 新座キャンパス

#### 教務部教務課 公開講座係

〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6  
TEL. 048-478-3340  
FAX. 048-478-4133  
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp  
https://www.atomi.ac.jp/univ/

#### 文京キャンパス

#### 文京キャンパス事務局 公開講座係

〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2  
TEL. 03-3941-7420  
FAX. 03-3941-8333  
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp  
https://www.atomi.ac.jp/univ/

# 跡見の二つのキャンパスで「新しい学び」を愉しむ

## 新座キャンパス

教養コース

## SDGsと私たちの生活

—自然と共生する持続可能なまち（地域）をつくるためにはどうすればよいか—

令和5年11月18日、25日、12月2日(土) 毎週土曜日(全3回)

時間 10:00~11:30 場所 新座キャンパス(教室未定)

対象 15歳以上(中学生を除く)の男女 定員 100名 受講料 無料

講座責任講師 本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科 教授 宮崎 正浩

11/18(土)

### 自然と共生する生活環境を実現するためにはどうすればよいか？

—ネイチャーポジティブ（自然再興）の視点から—

講師：本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科 教授 宮崎 正浩

世界的に自然（生物多様性）は減少しており、生物種の大量絶滅が起きていることが心配されています。このため、国連では2030年までに自然の損失を止め、反転させるネイチャーポジティブ（自然再興）が目標となっています。本講座では、これらの最新の情報を紹介し、自然と共生する生活環境を実現するために私たちにはどうすればよいかを考えます。

11/25(土)

### 脱炭素社会実現に向けたアクションを考える

講師：本学兼任教員 宮崎 智子

近年の猛暑や豪雨などの異常気象は、地球温暖化が原因の一つと考えられています。SDGsのゴール13では、「気候変動に具体的な対策を」講じることを目指しています。しかし、SDGsは国や自治体だけが取り組んでいても達成は出来ません。パートナーシップによる目標達成に向けて私たち一人ひとりに何が出来るかを考えるために、各種事例を紹介していきます。

12/2(土)

### 環境にやさしい商品選択を考える

—温室効果ガス排出の見える化の視点から—

講師：本学マネジメント学部生活環境マネジメント学科 教授 安藤 生大

お店に並んでいる商品からは、それを「つくる」、「つかう」、「する」の一生涯（ライフサイクル）を通して、たくさん二酸化炭素が排出されます。本講座では、身近な食材である「キャベツ」や「米」を例として、それらのライフサイクルから排出される二酸化炭素の量を見える化します。その結果は、「価格」と「機能（味など）」に次ぐ、新たな商品選択基準としての「カーボンフットプリント」の理解をもたらしてくれます。

申込方法

受付期間

Web・往復はがきのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。  
①「SDGsと私たちの生活」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所 ④電話番号 ⑤年齢  
⑥職業 ⑦本講座をお知りになったきっかけ ⑧次回以降の本学公開講座のご案内ご希望の有無  
受付期間：10月11日(水)～10月31日(火) 必着  
受付方法：Webフォーム（受付開始日よりHP上に設置）・往復はがきのいずれか  
※E-mailでのお申し込みはお控えください。

申込先

問合せ先

跡見学園女子大学 新座キャンパス 教務部教務課 公開講座係  
〒352-8501 埼玉県新座市中野1-9-6  
TEL. 048-478-3340 FAX. 048-478-4133  
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp https://www.atomi.ac.jp/univ/

## 文京キャンパス

教養コース

## 芸術の都をたずねて

—ローマをめぐる美術と旅—

令和5年12月9日、16日、23日(土) 毎週土曜日(全3回)

時間 10:00~11:30 場所 文京キャンパス(教室未定)

対象 15歳以上(中学生を除く)の男女 定員 100名 受講料 無料

講座責任講師 本学文学部人文学科 准教授 鏡持 あずさ

12/9(土)

### ローマとルネサンスの芸術家

講師：本学文学部人文学科 准教授 鏡持 あずさ

イタリア・フィレンツェで華々しくルネサンスが始まった15世紀はじめ、ローマはかつての帝国首都の面影もなく荒廃していたといわれています。教皇たちはフィレンツェから芸術家呼び寄せ、聖堂や礼拝堂を壁画で飾りました。ミケランジェロやラファエロに至るルネサンスの芸術家とローマとの関わりをご紹介します。

12/16(土)

### バロック美術と永遠の都に引き寄せられた画家たち

講師：本学文学部人文学科 教授 栗田 秀法

宗教改革を乗り越えたカトリックの総本山ローマはヨーロッパ中から巡礼客を集めるだけでなく、北イタリアからはカラヴァッジョ、アンニーバル・カラッチ、スペインからはベラスケス、フランスからはフッサンやクロード・ロランなど、多くの芸術家を引き寄せました。ローマの誘惑に魅せられた画家たちの作品をご紹介します。

12/23(土)

### 18-19世紀の風景絵画で旅するローマとその近郊

講師：本学観光コミュニティ学部観光デザイン学科 准教授 河村 英和

ローマは観光ツアーの重要な目的地で、ローマ平原は理想郷アルカディアとして描かれ続けました。馬車道沿いのローマ周辺の村々は、古代遺跡だけでなく、湖や滝・深谷の美にも魅せられた18～19世紀の外国人画家・旅行者たちにとって馴染み深く、彼らは、ローマ近郊の風景を背景に民族衣装の美人も発見させてゆきました。

申込方法

受付期間

Web・往復はがきのいずれかに下記の事項をご記入の上お申し込みください。  
①「芸術の都をたずねて」受講希望 ②氏名(フリガナ) ③郵便番号・住所 ④電話番号 ⑤年齢  
⑥職業 ⑦本講座をお知りになったきっかけ ⑧次回以降の本学公開講座のご案内ご希望の有無  
受付期間：10月11日(水)～11月14日(火) 必着  
受付方法：Webフォーム（受付開始日よりHP上に設置）・往復はがきのいずれか  
※E-mailでのお申し込みはお控えください。

申込先

問合せ先

跡見学園女子大学 文京キャンパス事務局 公開講座係  
〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2  
TEL. 03-3941-7420 FAX. 03-3941-8333  
E-mail: d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp https://www.atomi.ac.jp/univ/

### 新座キャンパス 文京キャンパス 共通事項

- 受講特典：全3回全て出席の受講生に、公開講座修了証を発行いたします。
- 感染症対策：発熱、体調不良時には公開講座の受講をご遠慮いただく場合があります。
- 教養コースは、受付開始後、履修にて受講証を郵送いたします（出席者多数の場合は抽選となります）。
- ※お申し込みいただいた方々の個人情報、跡見学園女子大学教務部教務課公開講座係にて、講座案内の他、運営に必要な範囲で適切に管理し、使用いたします。個人情報については同意書にも第3者に開示・提供することはありません（法令などにより開示を求められた場合は除く）。
- ※悪天候等、不測の事態が生じた場合には、本学HPに中止や時間繰り下げ等の情報を掲載いたします。







公開講座ダイジェスト 2023  
跡見学園女子大学公開講座の記録

---

令和6年3月発行

発行 跡見学園女子大学

〒112-8687 東京都文京区大塚1-5-2

電話 03(3941)7420

FAX 03(3941)8333

E-mail d-kyomu@mmc.atomi.ac.jp

URL <http://www.atomi.ac.jp/univ/>

---